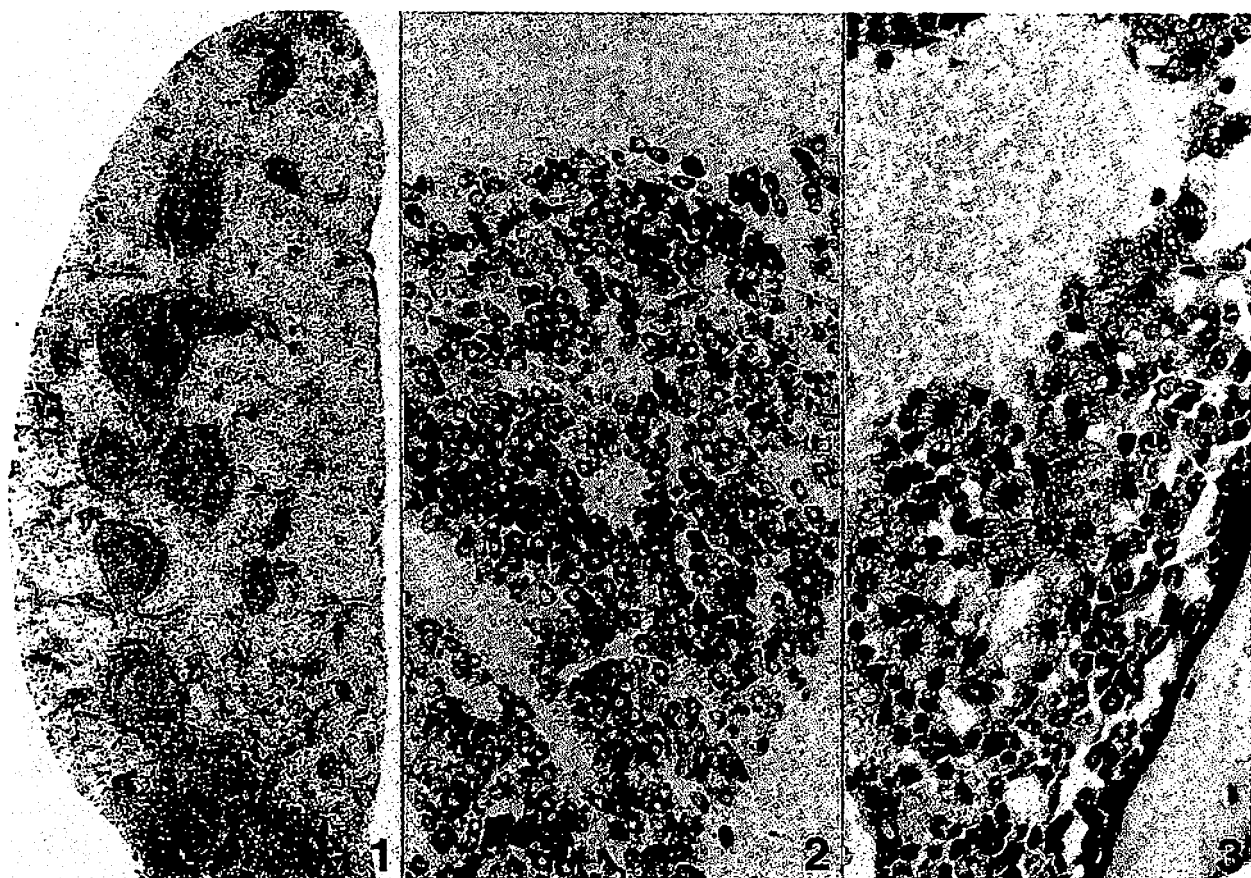


マウスのSystemic Mastocytosis

麻布大学病理学教室・食品農医薬品安全性評価センター出題 第23回獣医病理学研修会標本No.396



動物: B₆C₃F₁ (C₅₇BL×C₃H), 雄, 57週令。

臨床的事項: 4週令で搬入, 1週間検疫後, 農薬の慢性毒性試験(低薬量群, 混飼投与)に供した。飼育は, S P F環境下, 個別飼育。飼料と水は, とともに自由に摂取させた。この症例は, 40週令頃から体重の増加がみられなくなり, 屠殺時体重は31.6gで, 群平均体重44.6gに比べて低値を示した。屠殺前の1週当りの飼料摂取量は34.5g, 飼料効率0.5であった。しかし, 一般血液検査, 白血球像, 血液生化学的検査, 尿検査の結果は, いずれも同時に飼育された正常なマウスの値と有意の差はなかった。

剖検所見: 全身の削瘦と脾臓横隔膜面腹側端に5mmの結節性腫瘤が観察されたが, 他臓器には著変は認められなかった。

組織学的所見: 脾臓の結節部では, 正常構造を著しく歪曲して赤脾髄に瀰漫性に増殖する明調な細胞群が認められた(写真1, H-E, ×100)。同様の細胞は, 結節部以外の赤脾髄, 脊椎および長管骨骨髓にも小塊状に多数見出され, 肝類洞内にも散見された。これらの細胞の胞体

は大きく, 円形~多角形で, 大きな淡明な核が, 胞体のほぼ中央にあり, 1~数個の明瞭な核小体を有し, ごくまれにはあるが核分裂像もみられた。細胞質は, H-E染色では, 弱好塩基性に染色され, トリイジン青染色でメタクロマジー陽性を示す微細顆粒が豊富に認められた(写真2, トリイジン青染色, ×200)。この微細顆粒は, アルシアン青, アニリン青, アルデヒドフクシン, オルセイン, ウォーター青などでも陽性に染め出された。

これらの特徴から, 問題の細胞は肥満細胞と考えられ, 正常肥満細胞よりも胞体は大きい。肥満細胞顆粒は, 正常細胞と同様の形態と染色性を示すものが多かった。またときおり細胞質内に多数の小空胞形成のみられる細胞があり, 異染色性顆粒が空胞周囲をとりかこんでいた(写真3, トリイジン青染色, ×400)。

しかし, 他種動物の肥満細胞腫によくみられる好酸球浸潤はみられず, マウスの肥満細胞腫瘍の特徴かと思われた。

診断: マウスの全身性肥満細胞症。